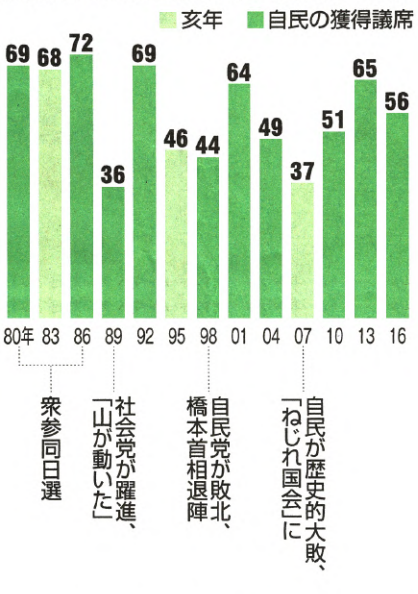




98年7月、参院選惨敗を受けて開かれた記者会見で、退陣を表明する橋本首相

参院選での自民党の獲得議席の推移



もっと知りたい

参院選2

参議院は「良識の府」と言われる。国会審議で衆議院の行き過ぎを防ぐ役割を期待されるためだが、参院選の歴史を振り返ると「政局の府」の印象が強い。

「政権選択」が問われる衆院選と異なり、参院選は、ときの内閣の業績や働きぶりを評価する「中間選挙」と位置づけられる。しかし参院選で大敗したことをきっかけに退陣に追い込まれる内閣も少なくない。

1989年の参院選で自民党は惨敗し、過半数割れに追い込まれた。宇野宗佑首相の女性スキャンダルが批判を招き、内閣は退陣。躍進した社会党の土井たか子委員長は「山が動いた」との名言を残した。98年の参院選でも自民は改選議席を大きく割り込み、橋本龍太郎内閣が退陣した。

さらに第1次安倍晋三内閣で迎えた07年の参院選。閣僚不祥事が続発し、自民が歴史的な大敗を喫した。衆

いとし 亥年の「選挙イヤー」 自民は苦戦？



マダニヤイ

参の多数派が異なる「ねじれ国会」が生じ、内閣は約2カ月後に退陣。安倍首相は今なお「12年前の大敗は当時総裁だった私の責任。一日たりとも忘れたことはない」と振り返る。

なぜこのような結果が起こるのか。有権者の投票行動に詳しい崇城大学の今井亮佑教授（政治行動論）は「選挙の結果、内閣が変わっただけで政権を担う政党は変わっていないところがミソです」と指摘する。

「参院選は政権選択選挙ではないので、『野党に政権までは任せられないけれど、内閣に不満がある』という人が安心して野党に投票しやすい」

そんな心理を反映し、たとえば「選挙区は自民、比例区は野党」と投票先を分けてバランスをとろうとする有権者も一定数いることが分かっているという。

さらに今年は波乱が起りやすい要因が重なる。4年に1回の統一地方選と3年に1回の参院選が重なる、12年に一度の選挙イヤー、亥年だからだ。

この年は春の統一地方選で地方議員が疲弊し、夏の参院選では有権者に投票を働きかける力が弱まる。その結果、堅固な地方組織を持つ自民でも苦戦する――。そんな「亥年現象」が起けるとされる。

実際、12年前の07年参院選で自民は大敗。24年前の95年参院選では当時の自民、社会、さきがけの与党3党が過半数を維持したが、前年に結党した新進党が比例第一党になった。

さらにさかのほれば、36年前の83年参院選では自民が安定多数を確保したが、12月の衆院選で過半数割れに追い込まれた。

ただ、今井教授は「亥年現象」を引き起こすメカニズムの存在を認めながらも、今回も自民が苦戦するとは限らない、と言う。

「統一地方選にあわせて選挙を行う『統一率』が下がっているの、あまり大きな影響はでないのでは」

一方で、野党が分裂している状況を指摘して「そのことで棄権を選ぶ人も少なくない」とみる。

夏の参院選。その結果は、安倍内閣の浮沈や野党のあり方にも直結することになりそうだ。

(山下剛)